■特集・造園論■

空間文化論としての日本の庭園

斉 藤 一 雄*

Japanese-gardens from the Viewpoint of Culture in Spacing

Kazuo SAITO

摘要：空間文化論を環境システム論として考察した。そこでまず、今昔の日本の庭園につき、主として住宅庭園をとりあげた。住宅庭園に於ける主体性の回復及びその地域環境システムに於ける位置付けを見、かつ農村庭園の調査から、環境システムの原型について、ひとつの総括を行った。

1. 研究方法

本テーマは内容が大きくかつ深く、かなり総括的な意味合いをもっていて、しかも頁数が限られている。そこで次のような方法をとる。

- (1) まず、現代の庭園についての問題意識を明らかにして立論の方向を定める。
- (2) 上記から文化と庭園について過去の研究を総括し、改めて定義を行う。
- (3) 庭園文化の基盤を、主体の性質とその環境のシステムとしてとらえ、物質循環と景の主軸をなす〈水系〉を中心とする池泉庭園をとりあげ、その変化の実態を統計によって明らかにする。
- (4) ついで、環境システムという基本的観点を強化する為、農村庭園のもつ原型的な特色を実地調査を総括して見直す。

2. 問題意識

1982年の夏も、長崎と中部が大水害に見まわれた。周知の様に、我国の災害の大部分は風水害によるものであって、年々この種の痛ましいニュースが絶えない。

住宅とその庭園にとっては、安息空間は最も大きな存立条件である。だからこそ、その立地の選定は古来最も重視されたのである。存立基盤論は、立地選定の科学と安定空間の基礎構造をつくりあげる技術論として、関係諸科学を動員するスケールの研究を必要としている。

沖縄本島の北部は、いわゆる山原型と称されるコンパクトな陸海システムの典型として知られている。ここでは、開発による土壌（マージ）の浸食によって河川、ラグーンのいわゆる赤土流出問題が発生している。これが

陸海の生態系、生産、レクリエーション、そして庭に与える影響は測り知れないものがある。これは、環境のシステムの一部の変化によって不安定化の連動を起す典型的な例である。

最近各地で、外見上美しい新住宅団地ができつつある。そこでは、おしきせの住宅の外構と庭とが並んでいる。しかし、10年経過した筑波研究学園都市の住宅地の例では当初のおしきせの植栽デザインに対して、かこいやベランダの植栽等によって、次第に個性化してきている。そこに皮肉にも住宅庭園の本質を発現させる契機がみえる。住宅の庭は、人が自ら自らの環境を自由にコントロールできる現在唯一といってよい場であって、本来画一的なものではありえない。

上記三問題例は、いずれも、庭園をつくる主体性の問題と、地域環境システムの中に位置付けられている現代庭園について、基本的な構造的把握が欠けているところに由来するものと思われる。本論文は、以上の問題意識をその根底においている。

3. 文化及び庭園の概念

文化については、文化社会学や文化人類学、歴史学等の種々の立場からの解釈があるが、ここではそれらを参照し、総合的見地から文化を、一言にしていえば、人間の生き方としてとらえる。すなわち、〈大部分の意志決定主体が、時代の社会組織や社会制度、慣習のもとに、その価値観を構成し、時代の技術体系を媒介として、長期間自然をコントロールし、適応していく、一定の生活様式〉。この意義は、後述する筆者の環境システム論と密接に関連している。庭園は、この様な時代の生き方の中に位置付けられた空間文化活動の一種である。

* 千葉大学園芸学部

さて、「庭」とか「園」とかのことばの歴史的な解釈は別として、現在の造園体系の中での庭園の解釈は、意外にもまだ定説がない様に思う。従来の説では大体次のとおりに分れている様に思う。

自然材料を
美的かつ機
能的に用い
る | —(1) 個人や家族の、居住の為の造園 ¹⁾
(2)(i) 建築物(住居を含む)を重視し、これに接した造園(私的なものにとどまらず公園、その他の内部にも存在) ²⁾
(ii) 私的居住をはじめとして、共同住宅、学校、工場、ホテル、社寺、公共建築、福祉施設、墓園等に分化した夫々の機能に応じた造園 ³⁾ |
|------------------------------|---|

前述の庭園に対する見方には二つの態度がある様に思われる。一つは環境形成に対する、私的主体とその目的を重視する態度、一つは設計や意匠の傾向を重視する態度である。個人又は家族を主体とする居住環境の造園を庭園の主軸とすることは、後者も重視しているところである。しかし、とくに建築との関係を計画設計、及びデザインの中で考慮をはかるべきものとし、技術的に、人工的構成の進んだ傾向の強いものを庭園とする、というとらえ方が後者には並存している様に思う。いわゆる〈庭園のデザイン〉と称される概念であって、建築の近くに限ることなく、公園の中に石組や滝などが構成されているときもその様にいう。その様な、デザイン技術を重視した庭園概念がある。しかし、私としては、庭園等の用語とは一応別の問題として、造園は主体とその目的、それに対応する環境の形成という観点をまず、環境形成の中心概念に置くべきではないかと考えている。主体が定立されて、はじめてその環境が確定されうるからである。

しかし、本論では与えられたテーマ上、現在のところ、庭園の概念の中で最も典型的なものとは、環境を形成管理する主体を私的居住者に置き、その要求する環境を形成する造園という概念とする。そして、技術的に類似の傾向をもつその他のものは、主体の諸条件を考慮の上、一応庭園に準ずるものとして扱うことにする。そこで本論文に於ては、住宅庭園について主に述べることにする。

ここに、日本庭園文化という場合は、その範囲は日本庭園式という伝統的庭園と称されるものに限らないこととし、伝統的庭園を含んで、我国の風土の中で行われる庭園の問題を扱うこととする。

4. 住宅庭園文化の基盤

庭園の形成とコントロールの主体は周知の様に複数である。場合によっては別の社会組織も関与するだろう。

主要なものとしては、一般に築造、管理の意志決定の主体(オーナー)と、設計主体、施工主体とがある。設計主体は築造主体(オーナー)の目的と築造者のもつ環境形成のポテンシャルを最大限に発揮せしめることに最善の努力を傾けなければならない。そして結局これを統合する者は、本来そこに住むオーナー自身である。これを特に統合主体と名付ける。

現代は、国土的、或いは国際的スケールで空間秩序が進められているのであって、庭園の位置付けもそれに従って動いている。主体に関していえば、生活者のライフサイクルは具体例を挙げるまでもなく、その行動の種類、半径、質量共に構造的には全く過去とは異なっており、しかも千差万別である。しかし、そこには選択の自由があっても、自由に環境をコントロールして、個人の複雑な人間性の開発に応じうるものがない。その本源的な欲求不満に庭園だけが対応しうるとはいえないが、庭園の受け持つ意味は大きいといえる。しかも、現代は簡単な封建的閉鎖社会ではなくなり、産業、流通から教育に至るまで、強弱広狭様々の主体環境の交錯した状況で進みつつある社会である。その相互関係は、タテワリ社会といわれる様なつながり方や、ヒューマンスケールを越えた文明の展開や、文化の複雑な分化などによって、何が真の問題で、どの様な相互関係で社会が動いているか、いよいよあいまいになりつつある。いわば、〈自己を見失いつつある時代〉という時代背景を考慮しないわけにはいかない。画一的な住宅計画は、この様な没個性的な社会的性格を反映したものと思われる。主体を見失っている場合は、商業、官僚又は外からの観念等、何らか別の主体的概念が入りこんでいることにもなるので、そのことを自覚することによって、住居者が自分たちの運動によって、諸制約を克服し、自分たちの環境形成の基盤をつくった例もある。してみれば、住宅庭園の問題は、一つの文明批評の立場を見ずえて、社会の基礎的集団として、まず自己を回復する場として機能することが、現代の住宅庭園の最も大きな文化的課題となりうると考える。

次の問題は、主体に関連する環境の問題である。親しい人との家族的コミュニケーション、自然愛好、防災、あそびと休息、芸術的表現による生命の躍動と安定等、すべて住宅庭園への要求は、住宅生活を中心とするものであって、安息の境地を求める範ちうにあるだろう。したがって、庭園築造に当っては立地の選定を最も重視したのである。現代としては、自然、社会共に厳しい環境の中で、安息環境を選択又は創造することが最も根本的な課題となる。

庭園は、その宿命として風土の影響からのがれることができない。風土をこの稿では、大小のレベルにわたる環境システムとして、構造的にとらえることにする。環

表1 東京における江戸時代以降、主要池泉庭園の水源の変化パターン⁵⁾

変化後 元の型	潮入型	湧水型	湧水+井戸 (水道)	上水型	河川型	井戸型	水道型	雨水型	廃園
潮入型 6(10.2)*	1(16.7)**	14(37.8)	4(10.8)		1(2.7)	14(37.8)	1(16.7)	2(33.3)	2(33.3)
湧水型 37(62.7)							1(2.7)	1(2.7)	2(5.4)
上水型 8(13.6)						5(62.5)	2(25.0)		1(12.5)
河川型 5(8.5)					3(60.0)	1(20.0)	1(20.0)		
井戸型 3(5.0)						21(33.3)	2(66.7)		
計 59(100)	1(1.7)	14(23.7)	4(6.8)	0	4(6.8)	21(35.6)	7(11.9)	3(5.1)	5(8.5)

* 元の型の百分率, ** 変化の百分率

境システムとは、主体とそれに関連する環境の系を略して称することとする。ここにレベルとは、意志決定にかかわる基礎的集団（家族、集落、市町村、広域自治体～）。又は基礎的集団と派生的集団に分ける）とし、それらにかかわる環境をレベルに分ける。この環境システムは重層構造をなして関係し合う⁴⁾。かつて、安息環境として選定された立地につくられた庭園が、現在どの様になりつつあるかを知ること、その一つの厳しい証明にもなる。

庭園のいわゆる山水形式は日本の、壮年期の多いモザイク形地形の理想型とされている。京都の山水型の庭園の分布が涌水地の多い所（山裾の急扇状地）に多く立地したのは当然である。それらの水源はまた、上水や河川や海でもあった。江戸、和歌山などでは汐入りの池をテーマとした庭園がつくられた。東京の江戸時代以降のものについてそれらの水源を調査してみると、現在表1の様に变化している⁵⁾。この表の理解の為に数例を簡単に説明する。例えば清澄庭園は汐入りの庭であった。しかしこの様能は関東大震災によって、水門が壊れて水の循環は失われ、今はその水源は雨水である。したがって、停滞した池水に、夏にはアオコ（藍藻）が発生して濁り、水景観としては著しく低下してしまっている。その上、江東一帯の地盤沈下によって、池縁の岩組は不等沈下を起し、水面下に没してしまったものも少なくない。この事態は池をテーマとするこの庭園にとっては致命的である⁶⁾。

旧芝離宮庭園も汐入りの庭であったが、周辺は埋立てられてビル街となり、海からの水循環は絶たれた。池水は同じく雨水としびれ水のたまり水である。したがって、夏にはアオコが発生してみる影もなくなっている。護岸の磯石組の上をフナムシが動いているのは、なおフナムシの生活環境が残存していることを示しているが、景観的には問題にならないし、離海の方は決定的であ

る。ここでは、関東大震災による被害の他に、昭和47年6月、東海道線のための地下のトンネル工事の圧縮空気によって、浮島の一部の崩壊、沈没等の被害があった⁷⁾。浜離宮も汐入りの庭である。水門はなお生きていて、水の循環は行われており、汽水特有のボラの動きも見えるが、特に築地川から船だまりへの水は汚濁しているし、池水景観も昔日の比ではない。六義園の池はその建設以来（元禄9年<1696>）主として玉川上水の支流である千川上水を水源としていた。しかし、昭和42年以来、地下鉄工事の為にその利用は閉ざされ、昭和43年からは井戸水になった。また池水庭園の宿命はその周辺からの浸食土砂の堆積である。庭園内のヘドロの堆積は、池水の水質環境を悪化せしめる。ヘドロの浚渫についてはすでに桂離宮、新宿御苑、銀閣寺、浜離宮等の庭園の例を聞くが、六義園では、昭和57年7月15日から9月20日までの予定で、概算5,800m³の浚渫が進められている。私共の調査では、陸地の浸食は徐々に進み、護岸線が後退を余儀なくされている所がある。

この様に庭園はその内部の変化と共にその基盤となる地域レベルの環境システムの中で、孤立閉鎖的なものではありえない。そこには、各種の外部要因によるシステムの分極化が進行していることは、今や周知の事実である。庭園内技術が支えうる範囲には限界がある。それは水の視点からのみではない。例えば借景庭園の場合、修学院離宮は前面の岩倉山を宮内庁が買収することによって、庭園の風致を維持したことで有名だが、周辺の開発によって多くの借景庭園は、その価値を決定的に減じつつある。周辺地域の大気汚染や揚水等が庭園内生物生態系に与える影響については、すでに多くの報告がなされている。

以上の事情は逆にいえば、健全な庭園、空間形成の骨組は、自然材料の不断の変化という宿命をもちながらも地域レベルにわたって、地形、気象、植生、大気、水等

の自然の条件の合理的な構造化を基礎とすることを再確認することとなる。次に庭園レベル内の関係に目を向ける。そこでは各種空間の配置、規模、デザインが夫々の空間質の相互関係、つまり空間間の矛盾、対立、調和、補完、すみわけ等を契機としてなされることに着目する。例えば、室内と庭との接点空間として軒内が存在し、池と陸との接点に護岸ゾーンが存在し、家とコミュニティとの接点に門を含む外構が存在する等々隣接空間の性質によって、接点として統一する技法が決められる。これらの接点空間の形成の如何は、目的の空間の形成、管理の成否を決定する程重要である。それは、両空間の性質を統一的に限定し、つなぎ、さえぎり、あるいは方向付け、展開せしめる〈システムの要部〉となるものが多いからである。この問題は周知の様に程度手はつけられてはいるが、今後はより本質的に環境システムとして、軒内の用石の微妙な配置や寸法という家レベルから、コミュニティ以上のレベルの空間秩序に及ぶ環境の構造を統一的に把握する為に、総合的に研究される必要がある。それらについては今回、省略する。

5. 庭園の原型について

環境システムのなとらえ方をより確かめる為に、庭園の原型を考える。庭園の原型とその変化を長い歴史の道程から考察することは、周知の様に古代文明の発掘や、史家の努力によって多くの知見が蓄積された。しかしそれと共に、現代の時点で、庭園の原型と変化をみることも、筆者としては重要と思う。特に、日本の伝統的な庭園が、初めに、荘園から遠く離れた都にあって、生産環境を知らず、しかも荘園によって養われた生活によって開花せしめられたということは、一面、日本庭園を生活の消費の断片として一種特別な、貴族的趣味志向としてとらえる〈構え方〉をもたしめた様に思われる。かつて、沖縄の中村家の屋敷を視察した時に、その外構をなす見事なサンゴ石灰岩の石垣の見切縁と堂々たるひんぶんと、石垣上に根付く黒々とした建築的なフクギ群のもつ、ファサード空間の見事さに注目し、さらにひんぶんと住家とによってかこわれた前庭、高倉、井戸の周囲の構成の、実際ので簡潔な角パターンの生々とした造形に強く心を打たれた。その後多くの琉球の住宅庭園を見る機会があったが、琉球の農家のもつこうした、防風と生産に対応する空間構成は好ましい地域特性をもっていた⁸⁹⁾。その中村家の奥座敷に当る、一番座に接して観賞的な築山式の岩組があったが、これは全く貧弱であった。これは名主階級の農家の庭の接客用をも兼ねた施設でもあろうが、琉球の人たちをはじめ、多くの人々はこの部分のみを〈庭〉として考えてしまう。そこに現代庭園観の病弊をみることができるのであるが、その築山の部分は中央文化の、しかも下手な追隨にすぎない。この

様なことから、筆者は、本質的に实际的で美しい農家の庭に興味をもった。農家の庭は生産環境と生活環境とが一体となっているのが特徴である。もとより住宅庭園は、野外の自然を、人間の欲求によって、安息空間として材料を選択し、人間的秩序によって構成したものである。したがって、自然のもっているポテンシャルを生産と生活という人間本来の生き方の中で統合的に構成してゆく方法は、庭園の原型によりふさわしいものと思われた。多くの農家の庭園は、造園的な構成として観賞に耐えうる様に成熟した芸術作品ではないのがふつうである。高価な材料を用いたり、多くの労力を要する管理はできないのである。我々が農家の庭園に目を向ける要点は、彼らが、実際の自然との生活の中で、いかに自然のポテンシャルを守りながら使い、使いながら守ることによって、空間文化を形成してきたか、その考え方や方法の骨組の洞察にある。その知恵から学んで洗練文化としてこれを高度化するところにこそ、大部分の日本の国土を形成している人たちのエネルギーを、庭園文化に高め上げていく可能性を秘めるのではないかと思われる。

我々は農家庭園の实际的なデザイン面に注目すると共に、その地域レベルの環境システムと家レベルの環境システムの一体化した姿に注意しなければならない。都市化の進行の中で、それがどの様に対応しつつあるかをみることは、原型とその発展を考察する上で重要であろうと思う。本稿の目的に合致するものとして、多数の例の中からここに二例を挙げる。

まずその一例は、茨城県桜村吉瀬及び花室集落に於けるものであり、平地集落の環境システムの一つの典型を示している。即ち、宅地群は村内を通る主要道路から枝分れた道路にクラスター状にかたまっている¹⁰⁾。それらは台地上にあり、前に簡単な庭(狭義の観賞本位のにわ)を備え、背後の斜面に、防風、燃料、有機質肥料、建築用、斜面の浸食防護、景観等を兼ねたケヤキとスダジイ群落や竹林、スギ林をもち、この台地に接する低地に水田を展開している。各家は宅地と宅地とをつなぐウラムチをもつものが多く、各家はウラムチを歩き来して、時に縁側で世間話をするのである。この様に、地形、植生、水、作物、庭と人間関係の緊密に一体化した生態的なシステムの形成が行われている。つまり、それはまとまった構成単位をなす広い意味の〈にわ〉である。それはおそらく長い間の農民の体験の集積によってでき上っているものであろう。

他の例は、岩手県和賀郡上長瀬野にある、高橋清吉氏の屋敷を中心とするものである。このことについてやや詳しく述べる。この地域は、南部藩が政策的にも、1734年、長瀬野堰を設けて、新田開発の安定化に努力を払うなど、重要な稲作地帯として早くから手をつけた所であった。野村¹¹⁾も、この地域を豊水地域の自然発生的な稲

作集落の典型として挙げている。高橋氏の土地は、豊かな沢水をもつ山林を背負っている。主としてこの水源を利用して、本家と分家の配列が、原則として本家を上位として、尻水が分配されていくシステムになっていた⁴⁾。かつてのこの散村的秩序を示す景観形成のもう一つの理由について、池田雅美¹²⁾は、(1)火災の類焼を避けるため、(2)耕地の中に宅地のあるのが便利のため、(3)耕地を分割するのを避けるため、などを挙げ、野村はこれに加えて、正徳5年(1715)、藩が出した分家制限令の影響を考慮している。この、上長瀬野集落は、他の古い集落によく見られる様に、そこから現在、沢内村全体のシンボルとされている和賀岳(阿弥陀岳)を望む景勝の地である。沢水環境系は、半ばくさび型にかこわれているか、一方に山を背負い、他に開けた水田平地をみるのがふつうである。沢水環境系は生産力の低い段階の自給自足の体制としては、地形の変化や、植生の多様性からみても有利な居住立地であり、それを共同社会として一

層強化するものとして、シンボル景観(阿弥陀岳)が役立つことは容易に推察できるであろう。

背後の山林には、本家のしるしとも思われる屋敷神として、清吉稲荷が祀られている。この山林は、建築材としてのスギや薪炭材、燃料材としての落葉樹や葉草等が生育している。沢水は、一つは溜池に貯えられて、ヌルメ(温水となる)となって水田へ導かれ、一つは住居に流れて台所用水となり、その排水は隣接する池に落とされる。池には残飯を餌とするコイが養われ、冬の雪や冷温を避けるために、コイのためにオダ木が三角錐型に組まれている。それは一見オブジェ風である。池の水は、さらに住居の北の池に導かれ、キタゴヨウとハウチワカエデやミズギボウシ群落にかこわれた、小池水庭園を構成し、さらに屋敷入口の溜池に導かれ、家の風格を形成する景水となり、かつ貯木場やタネ糞漬、耕作具の洗いの機能を果たす。この溜池からの水は、水田に次々と導かれ、また分家へも流れて使われる。したがって尻水と

表2 和賀川流域の水系環境系とにわ^{13)*}

系 項目	1. 沢水・涌水環境系	2. 堰環境系	3. 多目的ダム環境系
取水システム・範囲	沢水、涌水(清水の地名、扇端部他)。1600年前半まで。沢水長1~5km。自給自足の小宇宙イメージ。コンパクトなヒューマンスケールで、集落環境単位をつくる。(1~3は集落、地区、地域のスケールに対応)	和賀川本川、支川から堰により用水路をひく。1に重合して地区人工水系を形成。17C後半から現在まで。1675和賀の上堰20.7km、1967沢内の和賀西部土地改良15km等。道発達(1887平和街道、1891東北本線、1924横黒線等)	本川の大規模調節。コンクリート重力多目的ダム(湯田)。1954石羽根ダム、1964湯田ダム。2を包摂する地域人工水系生む。ダムを境に上、下流域利害相反。下流に幹線用水路81.2km、圃場内366.5km、交通発達流通すすむ。
管理主体	血縁、地縁の共同社会。慣習的管理体制。現在は個人的傾向、新しい見地で見直しされている。	前体制生き残るが幕藩体制(土木掛り)強化される。1系崩壊促進、民主化、土地改良組合。	利水者+行政+河川管理者。ダム水利権は建設省、巨大システムのイメージ。
住居・耕作地・にわ	<ul style="list-style-type: none"> 山裾、段丘及扇端涌水地。汎濫原、緩扇状地に進出できず。 集落中心の平均天空率80.92%、年積算直射日射量面積率85.18%。 茅葺屋根と調和した植栽環境の景僅か、大部分トタン屋根新建築、縁側消失(沢内)。 自然水の取込は、景と生産複合方式、観賞本位山水庭は碧祥寺(沢内)、稲葉神社(和賀) 借景は山のランドマーク、近中景に遠景加。扇端は3に同じ。 庭木景木はスギ、カラマツ、イチョウ、アカマツ、ブナ、カエデ類、ハンノキ類、ホウノキ、クリ、キリ(落葉広葉樹林帯) 	<ul style="list-style-type: none"> 新たに堰水路周辺加わる。水の相対的安定化により汎濫原、緩扇状地に進出。道際に集落。 天空率87.26%、日射量86.8%。 茅葺屋根殆んど残らず。大部分トタン屋根新建築に。1系の強化拡大傾向。 水の取込は1に加え人工水路からの取込。溝状水路は用材運搬、家畜洗浴、景水機能等。 借景は1、3両系に通ずる。 庭木、景木はスギ、カラマツ、アカマツ、コナラ、クリ、カエデ類、ヤナギ類、ハンノキ類等。 本系は1系をつなぎ開発域拡大したが1系全域を含まず。 	<ul style="list-style-type: none"> 水の相対的安定化進み、汎濫原、緩扇状地に全面的進出。新住宅点在(和賀、江釣子)。 天空率92.3%、日射量93.3%。 新住宅但し僅かで耕作地拡大。 水の取込は1、2系に加えパイプ導水へ分極化。 借景は山は遠景、近中遠景構成但し屋敷林による囲いの強化景観点在加わる。 庭木、景木はカラマツ、ヤナギ類、ハンノキ類、アカマツ、クリ等(緩扇状地)。 本系はダム上流流域の水開発制約、下流域を広く開発したが、下流域1、2系全域を含まず。

* 稲作を基幹とする風土の座標軸は水系である。その管理主体と、それに連なる環境を以て3系を想定する。

いえども、上流に位置する家は水を清浄に保つ管理上の心づかいが必要とされる。田の畝を流れる水は30cm程の幅で、ショウブの花が咲いていたりする美しい野辺である。小さな石や若干の泥で水の流れを左右できる程脆弱であるが、部落による水利慣行が厳しく行われていて、その秩序は乱れなかった。この様にトータルな環境システムがよくわかり、自分たちの手でコントロールできる系は、ヒューマンスケールとして管理が緻密に肌目細かくできるのである。しかし、一方水源が小さいために、旱天の時は水量の安定を保しがたい。したがって、かつては水争いが極めて深刻であった。水系が血縁を媒介として住居秩序を決めるのも、水支配がいかに根本的に重要であったかを示すものであった。と同時に、沢水環境系は住居を土地にしばりつける政治と相まって、血縁の小宇宙の相互扶助のシステムを保つ空間特性をも意味していた。

この沢水環境系は、家レベルの広義のにわでもあり、小集落形成の物質的オーガナイザーともなった。そうした歴史をふまえて、水利用の民主化が堰環境系によってすすみ、現在に至っているのである。家近くは明らかに生活環境としての庭園らしい構成を分化しつつあるが、深雪のため生垣による空間分化手法はとられず、前庭をはじめとして、池に至るまで生産環境の重合がみられて不可分の一体をなす素朴な構成である。つかい、まもり、ながめる機能が、それぞれやや濃度を異にし、或いは相互滲透したかたちで、生態的にも、空間的にも秩序化されている。この地域の庭園というものの原型とは、まさにこの様な系によって成立するものである。しかし、ここには沢水環境系から、現在の堰及びダム環境系までの空間文化が、今のところまだ重層的に息づいている。沢水環境系はかんがいとしての主要な使明を終ったが、そのもつ生活環境としての環境システムの保全性は変ることなく、依然として重要であり、非常の場合の水利の補完的役割をも果すものである。しかしそれにも増して重要なのは、村の〈生き方〉として志向する農畜林複合農業の基盤となる環境系の保全、資質の向上、高度利用という観点である。水利を基礎とする生産システムが巨大化し、アンヒューマンなシステムに向う程、沢水環境系はヒューマンスケールの環境単位として、主体的な統合力、文化的力量を養うルーツとして重要性を増すというリーダーの見直しと洞察がある⁴⁾¹³⁾。和賀川流域に於ける水系を中心とする環境系とにわとの関係は表2の通りである。

以上、各レベルの環境システムとにわとの関係をみてきた。その結果、たとえば伝統的な象徴的造園手法の洗練についても、しばしば述べた様に、こうした原型としての環境システムの論理の合理的な達成の中に位置づけられ、エネルギー化されて、はじめて今日の価値を創造することができると思うのである。

参考並びに引用文献

- 1) cf: 小寺駿吉: 造園の発達と文化, 94, 農業百科事典Ⅶ, 農政調査委員会, 1967
西沢文隆: 庭園論Ⅰ, 相模書房, 1975
上原敬二: 庭園論, 造園大系2, 加島書店, 1976
中村 一: <庭園>, 造園修景大事典, 同朋社出版, 1980, その他略
- 2) cf: 田村 剛: 造園学概論, P141~144, 成美堂書店, 1925
石川 格: 庭園学概論, 誠文堂新光社, 1978, その他略
- 3) cf: 関口鉄太郎監修: 造園技術大成, 養賢堂, 1978
池原謙一郎: <庭園>, 世界大百科事典, 平凡社, 1981, その他略
- 4) 斉藤一雄, 土方正夫: 地域環境総合診断におけるレベル手法とその景觀解析への適用, 環境評価と意志決定手法に関する研究, P115~137, 文部省, 1982
- 5) 竹林昭広, 貫井文雄: 自然システムとしての庭園と水の相互依存に関する研究, 千葉大学園芸学部造園学科卒論, 1982から作成
- 6) 北村信正: 清澄庭園, P67~69, 郷学舎, 1981
- 7) 小杉雄三: 旧芝離宮庭園, P69, 80~81, 郷学舎, 1981
- 8) 斉藤一雄: 沖縄に於ける生活環境単位と空間構成について, 環境科学セミナーⅠ, P25~38, 筑波大学大学院環境科学研究科, 1978
- 9) 沖縄開発庁: 郷土村, おもろさうし園計画調査報告書, P7~14, 1978
- 10) 佐藤正史: 集落環境整備に関する基礎的研究, P96~97, 筑波大学大学院環境科学研究科修論, 1980
- 11) 野村敏幸: 沢内考一地形と集落を中心に(八), 西和賀タイムス, 1980, 8, 9
- 12) 同上
- 13) 斉藤一雄: 和賀川流域の定住問題, 筑波大学大学院環境科学研究科北上プロジェクト調査報告書(未印刷), 1982

Summary : In this study I tried to clear the fundamental space structure of residential gardens in Japan by the methodology of anthropocentric environmental system.

At first, I defined culture anew. In short, it should be environmental system how to live over a certain period, I think. Therefore, we must grasp essentially owner's independent condition and its environment in gardening.

We can see often now, in many housing plans in Japan, the loss of individual character in each garden and taking some uniform styles. It would be the reflect of the social culture in Japan. At the same time, we can see often, each owner change the plan breaking an agreement between resident and constructive organ. Next, on 59 san-sui gardens in Tokyo since feudal age, we get their statistical datas of transition of water sources of ponds. It shows, there are several close environmental system between gardens and their regional area.

I tried to study to clear the prototype of environmental system at Sakura-mura, Ibaragi-prefecture and Sawauchi-mura, Iwate-prefecture. The later had the close system combined gardens and their mountain stream environmental system. I suggested that it is human scale and fundamental system to keep healthy each garden and living system in mountain village, through analysis of 3 type water system in Waga-river basin.